明治四十四年度

婦人の人格と修養の態度

わが日本女子大學校は創立以來十年の星霜を閲し、七回の卒業期を重ねて一千三十餘名の卒業生を出した、其過半數は家庭に入つて居るのであるが、高等女學校其他の教育に從事して居るものも少なくはない、尙ほ其外に母校に止まりて或は教務を助け、或は全國に散在せる卒業生と連絡を通じて社會部、教育部、家庭部等の各部門に分れて夫々各種の研究に力を竭して居るものも多くある。

處で、我女子大學校は學生修養の方針としては何處までも自修自動と云ふことを重んじて居ると同時に、學生相互間に同心協力することを忘れないやうにして居る。此事が適當に行はれなければ、所謂學問が身に入らない、上滑りのする知識を其秩序に頭腦に詰込むと云ふ切りな弊風に陷り易いのである。それが只だ試驗に追はれる暗記主義の教育であれば少しも差支はないのであるが、それは宛然蓄音機の蠟管のやうなもので、鵜呑にした智識をそのまゝに吐き出すと云ふに過ぎない、智識は固結して活力を失ひ、四圍の事情に應化して活動すると云ふやふなことは到底覺束ないのである。

されば家庭に入りても社會に出ても常に其境遇に順應して住く能力は學問と品性、智識と活動、修養と人格是等のものが充分に調和を得て居らねばならぬ、斯樣な調和を得ようと云ふには、どうしても學生修養の態度が改まらねばならぬ、卽ち學生をして常に自己と全體との關係を忘れぬやうにさせねばならぬのである。殊に我國の婦人に最も缺乏して居るのは卽ち此共同的精神であつて、個人としての人格が充分に發達しないの原因も恐らく此所に存するのである、個人の品性も人格も決して孤獨的に出來るものではないのである。

日本婦人を現狀より救ふて其發展を望めば、どうしても此缺陷を補はねばならぬ、我校は校風上特に注意して自動自修の習慣と共心協力の氣風を養ふことに努めて居るのも此必要に應じて居るのである。又卒業生團體なる櫻楓會の如きも是等の缺點を補ふことが主要なる目的の一である。吾々は是によりて少にても婦人の現狀を注意し個人主義に限り易い婦人の弊風を矯め、孤獨主義に流れ易き婦人の缺點を補ひ家庭の爲め、社會の爲めに立然せんとする精神を鼓吹せんことを望んで居るのである。

「四十大家現代女性觀」明治四十四年四月

頃日巡回中に予が最も愉快に感じたる一事

會員諸子、諸子の蒔きたる種子漸く果實を齎したるの觀あるは、予の欣びに堪へぬ所である。予も亦三十年來持續し來つた奮闘の結果が、諸子の果實によつて漸く此の問題の解決を得た心地がする。諸子よ予は、諸子の在學時代も今も尚、婦人の將來の運命は婦人自身の精神教育である事を常に云つて居るのである。生命の根本を味ふには、其の教育に重きを置かねばならぬ事を叫び來つたのである。此の教育の結果は一朝一夕には現れない。予は屢々躊躇し、或は絶望した事もあつたが、幸に此の主義を以て働くのは決して自分一人ではない事を見出して意を強うし得るのである。今回關西に旅行して、彼の地方の空氣が從前と異なり、豫想外の結果を來して居るのを見て、各地に奮闘しつゝある會員の精神感化が與つて力ある事を認め、之に依つて愈々吾が主義方針を確信する事が出來たのである。從來假說として立てたる我々の主義方針が、今日は最早明らかに證明せられたる眞理となつた事を認め信ずるのである。諸子よ、諸子の經濟は實に今日女子高等教育の死活問題である。第二の女子大學が成立するか否か、我が文明に第二の發展を齎すか、或は蹉跌を來すかは、全く櫻楓會員の態度如何にあるのである。今日の結果に迄漕ぎつけたのも會員の努力である。今後の發展如何も亦會員の熱誠如何に依るのである。諸子は何れにしても負はざるべからざる尊い責任のあることを感ぜずには居られぬであらう。

頃日予が最も愉快に感じて諸子に頒ちたいと思ふ一事がある。其は卽ち、從來予は世の青年男子が比較的物質慾に傾き易く、婦人に對しても不眞面目なる態度を取り、眞に婦人の人格を認めないと許り考へて居つたが、是は予の甚しき誤謬であつた事を、今回會員の主人達に會つて發見したのである。其の一人の話に「會員の熱誠がまだまだ足りない、過日來七十歳以上の御老人や予の熱心なる働きに對しても、會員の熱誠が尚一層發揮すべきではあるまいか。女子高等教育擴張問題を起す社會の空氣を作るに、當の責任者である會員其の人々はあまりに躊躇しすぎる」と予は比の言を多大の望みを以て聞いたのであつた。又今日迄は女子が家庭の人となれば讀書することを好まなくなる。周圍からも亦之を侮り嫌ひ、生意氣であると云つて否定した。卒業生が第一に感ずる困難はその非難であつた。併し

今は其の形勢は全く變つて、會員各自は最も注意して向上の道を辿らなければ、最早、既に社會の要求に後れて居るのである。期待したる會員諸子の活動が物足りない感じを與へつゝあるのではあるまいか。「我儕笛ふけども爾曹踊らず悲歌をすれども爾曹哭かず」と。諸子よ、予は諸子が靜かに内心の聲を聞くことを希望するのである。現今の青年が婦人に對する要求は實に眞面目なものとなり、婦人をして今一層精神的に宗教的に尊敬すべき價値を持たせたいと希うて居る所である。

予が此の感じを持つた原因の今一ツは、京都で會員に面會した時であつた。種々の經驗談を聞いた中に、其の夫達の要求を聞くと「高等教育を受けた婦人はもつと進み度い熱心を持つて貰ひ度い、是が爲にもつと讀書する必要があると思ふ」と。わが卒業生は自働的に、向上の精神を養ふと云ふ事は寸時も忘れぬ決心である。が家庭の人となり、母となると、讀書することも六ツかしい、支部會に出席することも容易でないと思うて居つたが、斯くの如き困難は既に過ぎ去つて却つて夫や母から其の必要を說かるゝやうになつた。社會は既に諸子の爲すべきことを奬勵し、期待して居るのである。躊躇する時ではない。蒔いた種子は既に實り、刈入るべき人を待つて居るの感じがするのである。予が最も愉快なる一事といふは卽ちこの事に外ならぬ。

諸子よ、諸子は世より一歩先驅を爲せる者と思つたが、今日は却つて時勢に後れて居るのではあるまいか。愉快なる時勢の要求を見出したると共に、予は又諸子が玆に大いに反省して、新たなる決心を要する事と思ふ。諸子の自愛自重を望む。

（「櫻楓會通信」第三十七號）明治四十四年七月

婦人の婦人觀を俟つ

母校第一回卒業生が相集つて、始めて櫻楓會を組織しました時に、私は何を以て此の會の精神を表したらよからうかと考へて、先づ樹木に譬へ櫻楓樹を想像に描きました。此の意味は第一に小さい種子から生じて、葉となり、枝となり、幹となり、次第にそれが蔓延つて終に果を結ぶと云ふ順序に此の櫻楓會の生命も育つて行かねばならぬ。卽ち成長といふことを意味したのであります。第二には内部より起る力といふことで、之までの我が國婦人界は、進歩發達することが出來ない。何時までも同じ程度にのみ止まつて、充分に内から出づる生命をのばして行く事が出來ないが、果して我が國婦人は自ら自分の境遇を開拓して行く事が出來ぬのでありませうか。私は卽ち其の行ける

と云ふ信仰を樹木に譬へたのであります。第三は有機的關係、卽ち共同と云ふことで、草木が有機的の關係を以て發育する如く、又吾々もお互に相扶け、共同して其の關係を作つて行かねばならぬと云ふ事を表したのであります。

それで此の櫻楓會が發達するには、恰も樹木の育つ時に、その內から新しき芽を生じて來る如く、內の力で每年一つの新しき仕事、活動を起して來なければなりません。櫻楓會は諸子が外より支配され、動かさるゝにあらずして、自分の內から考を起し、目的を立てゝ實行して行くと云ふ働きが生じて來る事を希望するのであります。そこで十年間の歷史を考へて見ると、微弱ではあるが兎に角諸子の內には、何か盡きぬ生命を持つて居ると云ふ經驗を味ふ事が出來て來たやうに思ひます。又我が國婦人の缺點としてお互の間に團體の生命を作り、意志の結合をなして共同的生活をすると云ふことが出來なかつたが、櫻楓會はたとへ少しでも、その經驗をしたと云ふ事實が、諸子の間に出來て來たやうに思ふのであります。今日では只繪や想像に描いたものでなくて、生きた櫻楓樹が益々成長しつゝあると思はるゝのであります。其の間の事を考へて見ると、暴風にも遭ひ、夏の酷暑にもあてられて、發達に種々妨害を與へられた感じがあります。又一方には內から出づる力の鈍く弱きを感じて、殆ど絕望せねばならぬと思つた時もありましたが、併しその內の力は眠らなかった。常に向上奮鬪の勇氣を以て、眞劍に努力を續けた爲、微弱ながらも涸死する事はなかつた。併し諸子は少しも今日の現狀に滿足しては居らぬのであります。種々の方面に於て、十年一日の如く忠實熱心に働いて居られるが、其の中に立ち入つて聞くと、各自少しも今日の狀態に滿足しては居らぬ。感謝の裡には常に壓へ難き渴望の泉の湧き出づるものがあるのであります。殊に我が國婦人と云ふ事を考へると、此の儘では目的を達する事が出來ません。こゝに於て會員諸子が一層婦人問題の研究を爲さる必要が起つて來たのであります。

今日は櫻楓館の第六回開館記念式を擧げて、浮田博士が社會學の立場から研究せられた婦人問題に就いて、御話を伺ふことに成つて居りますが、其の前に私は只一言、諸子が此の問題を研究なさる態度に就いて申し述べようと思ふのであります。

先づ此の問題を研究するには大體に於て三方面より進まなければなりません。三つの方面を言葉に表すに、わが國語では適當の言葉がないから世界共通の研究問題を表すに足る英語を借りていへば第一 Utopia (U=Eu=善topia=社會) 卽ち理想的境遇とでも譯すべきか。これは古くギリシヤに語源を發し、近く

七八十年前よりトマス・モーア氏に由つて稱へられて、其の研究は今日一層盛んになつて居ます。第二は Eugenics(Eu＝善 genics＝遺傳) 即ち理想的遺傳にて、これは十數年前フランシス・カルトン（チヤールス・ダーウインの從弟）が稱へ出したものであります。第三は Eunoia(Eu＝善 noia＝意志) 即ち理想的意志の意味で、これは最近に出來たもので未だ辭書にも表れて居ません。

今日人間が發達して行くには、以上の三方面が必要なのであります。社會の罪人を救ひ、人類を改善するには第一社會を改善しなければならぬ。即ち社會教育が發達せざれば奴隷、兒童、婦人を解放することも、人間を天國に導く事も出來ません。

ガルトンの說では人間は造るものではなく、生れるものである。即ち性の强弱、善惡は之を祖先から受けて居ります。そこで遺傳と云ふことを、社會政策にも、教育上にも、夫婦の關係にも及ぼして研究するのであります。然しこの二つでは全き結果を得られません。

第三にはよき意志が發達しなければ、眞の人間は出來ぬ。殊に今日重きを置かれて居るのは女子の自覺、女子の個性發揮といふことであるが、この個性の主となるものは意志であります。意志が健全に、自働的に支配をしなければ、家庭を幸福に、子供を立派に育てる事は出來ません。今日の我が國婦人わが櫻楓會員が行き惱む所の原因は玆にあると思ふのであります。畢竟婦人の研究も婦人自らなし得るだけの意志をつくらなければなりませね。私は多年女子教育に從事して種々研究して見るが未だ全くこの問題を解し得たといふことは云ひ得ない。否これは到底男子のみの考で定める事は出來ぬのではありますまいか。

私は幸か不幸か六ツの時に母を失ひて、母と云ふものに就いて考へた。其の後繼母に育てられて苦しんだ事もありますが、如何なる因緣か女子教育に從事するやうになりました。それから女子と一緒に生活をして、相互の感情の間に人道の音樂を味ひ度いと思つて、今日に及ぶ迄三十五年間今も尙努めて居ますが、さて中々其の本音は解り難いものであります。米國に居る間も女子の寄宿舍に起居して、女子と感情を合せ、意志を共にし、共同しようと勤めたが、今日に至つても尙何處に女子の缺點長所があるか、十分に解つたとはいへませぬ。又如何にせば發展するかと云ふ問題も解決に苦しむのであります。

眞の婦人の力を俟つより外ないと思ふのであります。今日浮田博士より社會學の立場から此の問題をお聞きになる諸子はこ

れを參考として、もう一つ諸子自ら、かゝる問題を研究なさることを希望するのであります。

（「櫻楓會通信」第三十九號）明治四十四年九月

多事なる今日

天長の佳辰に際し玆に諸子と共に恭しく聖壽の萬歳を祝し奉ります。私は昨夜以來いろ〳〵なる感じに充たされて居りますが、今その一端を披瀝してその問題に就いて皆さんと共に考へたいと思ひます。

人生の危機

「人」の生涯には貴賤を問はず、男女の區別なく、古今東西に亘つて所謂厄年と云ふ事が屢々來るものであります。それには生涯に二、三度遭遇する樣な大厄年、或は其の間に屢々來る小厄年もありますが、さてこの厄年と申すものは如何なるものであるかと云ふに、私は二つの意味に解せられると思ふのであります。卽ち我々は年を重ぬるに從つて身體に變化を來し、其の變化の來る度に、よくそれに應じて、自分で自分の身體を調節することを知らなければなりません。夫れをよくする事が出來たらその人の生涯に一發展を來すのでありますが、若し其の時によく調節する事が出來なかつたら、忽ち健康を害し遂に生命をも失ふのであります。彼の夭死する人或は氣候の變化に遭うて斃れる人は、多くはこの變化に應ずることが出來ないからであります。今一つの意味は、我々の生活して居る所の四圍の境遇の變化卽ち外界から來る所の厄年であります。此の樣に內からも外からも變化がある爲に個人が進み社會が發展して來るのでありますが、若しこの變化に應じてよく調節する事が出來なければその身及び其の社會の危急存亡に關するのであります。昔からこれを厄年と云つて參りましたが、今日はこれを人生の危機と申して居ります。そこで吾々の生涯に於けると等しく國家の進歩に對する刺戟に於ても、亦この危機に遭遇するもので、何れも大抵一定の年卽ち十年每に來るやうであります。わが國家の進歩の跡から申してもこの「危機」と云ふべきものが是迄に度々ありました。而してこの危機に應じて國家の進歩をお導きになりました陛下の御生涯、殊に天長節は、わが國家の生命の厄日と申しませうか、危機と申しませうか、兎に角國家にとりて殊に重大なる時機と相一致して居るといふことを私は深く感ずるのであります。卽ち陛下の御生涯の御厄年と、國家の危機とが誠によく揃つて居るのであります。

畏れおほけれど今年第六十回の陛下の御誕辰を祝し奉り、過去六十年の御生涯を恐察し奉りますと、陛下御年齢十歳に亘らせらるゝ御時、米提督ペルリ來りて我が國の門戸を叩き、彼の維新の曙光を促しました。やがて御齢二十にならせられまして、即ち明治の初年に及んで維新の大業成り、御歳三十にして内治漸く成るの時、西南の役が起りました。更に十年を經て御齢四十にならせられんとする時、即ち明治二十二年に於て憲法を發布せられ、御歳五十の時は前後相踵いで日清戰爭、北清事變、さては日露の大戰が開かれて振古未曾有の危機に遭遇せられましたが、畏くも陛下はこの危機に際して常に大捷を奏し給ひ、國運日々に揚がつて、過去五十年に於て維新の偉業を大成し、國を萬世の泰きに置かせ給うたのであります。御歳六十歳の今日、我が國は世界列國と伍を連ね、新たに來る世界の問題を我が問題としなければならぬ時となりました。近く東洋の革命は焦眉の急を報じて居るのであります。わが陛下にはかゝる際に常に御健康に亘らせられ、國運が愈々發展しようとして居るのは實に吾々國民一同が歡喜に堪へぬ所であります。さりながら又此の危機は國運發展の變り目であると同時に實に國家存亡の懸る所であります。陛下には今日の御誕生日に於きまして、國民と共に深いお喜びがあり、殊に御繁榮なる帝室の御有様は非常に御滿足に思召さるゝ御事と恐察し奉らるゝのでありますが、一方には又この危機に察して如何に軫念を腦ませ給ふかを拜察し奉らなければなりません。吾々は今日此所に集つて「君が代」を奏して聖壽を祝し奉るのみに止まらず、此の時大いに覺醒して、わが國事を夙夜に軫念あらせらるゝ陛下の叡慮に答へ奉るべき決心をしなければなりませぬ。私は今朝殊に我が國婦人が、殊に學生諸子が適切に銘々の責任を省みて發奮せんことを切に希望いたすのであります。

我が國教育の根本問題と婦人問題

陛下の軫念を煩し奉る所の内憂、外患或は近來の危險思想、又は御内帑金百五十萬圓を御下賜遊ばされ無辜の窮民を救はんとし給ふなど、之に答へ、これを全うすべき國民の責任は殆ど枚擧するに遑がありません。然るに國民の根本の力の源泉となすべき我が國の教育及び國民の母たる所の我が國の婦人の有様は如何でありませうか。一方には止め難き世界の大思潮に觸れて様々に起り來る諸問題を解釋して行かなければならぬ。日本人の頭腦は果して正しく價値多く教育されつゝありませうか。私は之に對して悲觀せずには居られないのであります。我が國の教育は未だ根本問題に達せずして、學生はまた眞の研究をし

て居らない、つまらぬ事に腦力を消費して居るといふ事は誰の腦裡にもうかぶ難問題であります。實は先頃リチヤード博士が來られまして、日米の平和を計る爲に兩國の青年の頭腦を刺戟したいと云ふので、奬學金をかけて「日米關係平和問題」と云ふ題の論文を募つて其の中からよいのを選定したいと云ふことでありました。當時大隈伯を始め、時の文部大臣、並びに菊池帝大總長其の他の人々も寄つてその意には賛成しましたが、さて斯のやうな大問題を今日のわが中學生が彼の頭腦を以てよく適切なる明晰なる意見を發表し得るや否やは一同が大いに不安に思つた事でありました。然るに私が二、三日前に見ました書物の中に一米國人の僅に十二歳になる子供の書いた論文を見るに、實に兩國の學生の頭腦の相違を感ぜずには居られません。それは日露戰爭當時に書いたものでありましたが、今茲に其の大體を申すと、

『支那と日本は一見すれば同じやうであるが其の實決して同じではない。この兩國は昔時に於ては世界の最も進んだ文明の國民であつた。然るに孔子といふ聖人が生れてこの兩國民に告げて云はれるには「汝等は汝等の祖先古代堯、舜の古き事を學び其の祖先の行つた事を其の通りに學べば足つて居る」と教へられた。日本と支那とは永い間その孔子の云はれた事を信仰して居つたが、先年合衆國はこの兩國に行つて告げて曰く、「貴方は世界の先進國である筈のものが却つて此の頃は退歩して居るではありませんか、若し此の際覺醒しなければ他の國から亡ぼされてしまふでせう」と云つた。所が支那では其の忠告を入れようとせず「合衆國は斯くの如き干渉を試むる權利はないものである」と云つて刎付けた。けれども、日本人は其の忠告を一理あるものとして受入れた。そこで亞米利加合衆國は新機械を送り新文明を日本に輸入することになつた。其の結果どうなつたかと云ふと日本は今露西亞と戰端を開いて居るが盛んに勝利を博しつゝある』と云ふ論鋒である。

次ぎに我が國婦人の有様はどうでありませうか。今世界の問題となつて居る婦人問題は我が國の婦人の上にも來るべき大問題でありますが、自ら起たねばならぬ當の婦人はまだ〳〵眞の覺醒が出來ない。第二國民となるべき子供を育てるのにも遠大の考がなく、自覺がなく、姑息の愛に流れて恰も玩具のやうに取扱つて居る感じがするのであります。之に比して亞米利加の婦人は凡ての階級に於て研究心が強い。百姓のおかみさんでも、下女でも、洗濯婆さんでも、仕事の餘暇には圖書館へ入つて各々の事を研究すると云ふ風である。先頃も私は一米國婦人から一冊の書物を送られました。それはウエルスレー大學總長

フリーマン・パーマー夫人の傳記でありますが之は其の良人パーマー博士が女史に對し尊敬と感謝とを以て綴られたものである。パーマー夫人はミシガン大學を卒業し、二十二歳で日本で云へば高等女學校の校長となり、二十四歳で大學の歴史の教授となり、二十六歳の時に大學の總長となり、後ウエルスレー大學の總長となつて同大學の校風を生んだ所の人であります。彼の國では斯う云ふ人は珍しくない。此の頃テキサスから歸つて來た人の話にも、或病院長をして居る一婦人の如きは、朝は下女よりも誰よりも早く起き、馬に秣をやる事から何から何迄自分でして、時間になると直ぐ患者を見舞ふといふ調子であると。

彼これ比較して見ると、我が國婦人の及ばざる事まだ〳〵遠いと云はなければならぬ。以上の二つの問題を考へると實に我が國殊に婦人は一大危機に遭遇して居るのであります。この危機を捉へてよく一大發展を來すのは各自の双肩に負ふ所の目下の責任であることを自覺せられたい。そして苦しくとも前途に新しい偉いなるものを生み出す希望を以て、自ら自分を育て、自ら修養に努めなければなりませぬ。

（「櫻楓會通信」第四十號）明治四十四年十一月

危險なる情熱の血

變愛と教育との關係は隨分錯綜して居つて、之れが研究も隨分六ケ敷い事だと思ふ。此の事に就いては、嘗て米國のクラーク大學の總長スタンデーホール氏が、其の著アドレッシングの中に、細かに述べて居るやうであるが、日本には未だ嘗て此の問題に就いて研究した人はないやうである。米國は御存知の通り、大學は男女混淆教育であります故、男女の學生間に於ける交際も自由であります。從つて男女間の愛情は常に融和され、絶えず一種の音樂的調和を得てるやうである。其故學校内には種々なる形式の下に戀愛なるものが成り立つて居るから、此の問題の研究も亦た頗る容易なものだと思はれる。之れに反して日本の學校は皆男女を區別して教育するから、自然學校内に男女の戀愛などいふものはなく、從つて此の問題の研究も中々容易なものではないと思ふのです。

結婚とか、性欲とかいふ目的を有する戀愛はさて措いて單に戀愛そのものゝ爲めに、惑溺する婦人が、しかも女學校通學中なる場合に、精神的肉體的に其の婦人は特殊なる現象、若しくは鮮かなる變化が生ずるが、又かゝる場合に於て教育家は如何

なる態度に出づるかを考へやう。

由來婦人は感情的、狂奔的、盲目的である故戀愛若しくは婦人自身の精神の動搖を來すやうな感情的事件に逢著すると、忽ちにして自己の意識を失ひ、前後左右を顧みず、唯だ感情の往くがまゝになし、ひたすら　狂熱し、感喜悲嘆する故、戀愛若しくは其他の事柄に就きて、尤も冷靜なる態度に出で、其の事件より受くる自己の影響などを考へ、しかも自己の現在の立場又は將來の成り行きなどをも深く考察する餘裕がなく、徒らに狂熱の中に自己の身體、其他の凡てを忘れる。其結果は該事件の結末と共に、自己の身體は奈落の底に陷つて、最早二度とは浮世の光明を仰がれないやうな悲しき運命に到達するのである。之を思ふと女子教育家は、婦人の此の弱點に注意して、健然なる科學、又は他の智識を以て、婦人の狂熱的感情を出來得るだけ制御し、種々錯綜せる感情を凡て智識を以て整頓して、圓滿なる人格を養成する事に努めなければならない。かゝる主義の下に教育せられたる近代の婦人は、一般に「冷酷なる女」とか「愛情の荒み果てたる女」とかいふやうな惡評を受けるやうな始末であるが、かゝる批評を受くる近代の婦人は、寧ろ喜ばしい事で、また現代の女子教育家も大に喜とする處である。何故なれば「冷酷なる女」とか「愛情の荒み果てたる女」とかいふ事は一面に於て、現代的教育即ち科學教育を受けて、凡ての事理に通じ、絶えず「智識の冷」を以て「感情の熱」を調節しつゝある婦人で、つまり「迷はざる女」、「狂熱せざる女」といふ意味であるからである。現代の女子教育家は、決して婦人が先天的に供へて居る愛情を殺ぎとり、而して愛情も、戀愛もない、つまり冷酷なる婦人を養成するのではなく、狂熱的、盲目的なる婦人をば智識的に導くが故に、現代教育を受けた婦人は、一般に從來の婦人と比較して冷靜な處があるやうに見える。決して現代の婦人に向つて愛情を捨てよ、戀愛を捨てよと強うるのではなく、愛情も戀愛も皆な智識と調和して、決して戀愛そのものの中に、自己の總てを犧牲にせよといふのではないのである。智識教育と共に情緒教育といふものを忘れてはならない。文藝、園藝、生花、琴などのやうなもので、婦人の趣味を向上させ、而して從來のやうに、悲しければ直ぐ泣き、嬉しい事があれば直ぐ泣き、若しくは笑ふやうな低級感情をば向上させ、尙狂熱的な感情を和げる事に努めるのである。

情緒教育を以て、戀愛教育とか、狂熱的教育と見做して、婦人の爲めに尤も危險なる教育方法だなどゝ怖れる人は、眞に情緒教育を解した人ではないのである。

「魔風戀風そよ〳〵と」とは目白と早稻田を唄つた俗謠である

故、目白の女子大學校の生徒間には、不健全なる戀愛に惑溺するものがあるだらうなどゝ噂するものがあるが、私の見る處では女子大學數千の生徒を通じて、一人の墮落生の居ないといふ事を斷言して、聊かも憚りないのである。創立當時は女子大學なる美名の下に、虚榮心に富める幾多の女生が、一時に入學した爲めに、中には種々なる階級の人があり、已に學校に來る前に墮落した人などもあつたが爲めに、一時は校名を傷けるやうなものもあつたが、斯樣な人は學校があまりに嚴肅なる爲め、何時しか去り、今日に至つては全く健全なる分子ばかりであるが故、私等は戀愛に惑溺する女生徒をば、如何に處置すべきかなどを考究する必要はないやうな有樣である。

勉强中の女生徒が、一度戀愛に惑溺するやうになると、今まで智識を以て抑制し來つた熱情が、一時に狂憤し來つて、精神は常に平和を缺き、激しき動搖を來し、學校の成績が惡るくなるか、缺席勝になるか、兎に角學科の方には惡しき結果を來し、また從來は平面的に見て居た此の世をば何となく、哀れと眺め、憂しと嘆き、寂しと喞つとかいふやうな一種の哀感が、内部精神に流露し來つて、今まで口號んだ詩や歌は、皆な自分の現在を歌つてるやうに思はれ、熱情の奔しつた詩や、悲しき戀愛を歌つた歌などをば、時も過ぐるも知らで讀み耽り、さては自分の現在の境遇と較べて、其處に一種の調和を見出しては、止度なき涙を流して悶え亂るゝのである、此の時には已に女生の前には、父母兄妹や教師などの外に、情緒亂れつゝある戀人のある、新しい社會が開けつゝあるのであつて、女は其の社會を憧憬しつゝあるのである。其故かゝる場合には、學校の成績が惡くなるのは當然の事であるから當事者は餘程注意しなければならない。然し乍ら此の場合に於て、しかも强制的な態度に出て、所謂生木を裂くが如き手段に出でゝはならない。徐ろに其の成り行きを見て、苟且にも其の戀愛が不健全であつて、頗る危險なもので、其れが爲め女生が一生を誤り、父母兄弟、若しくは、學校の名譽を傷くるが如きならば最後の手段を採らなければならない。教育家は單に生徒の在學當時の幸不幸を見て、悲喜するばかりではなく、行末の幸、不幸までも心せらるゝからである。

平塚明子は本校英文科の卒業生であるが、彼の煤煙や、「自敍傳」に描かれたる事實は、寧ろ學校を出てからの事で、在學當時は彼のやうな熾烈なる戀愛に惑溺したやうな事實はなかつた。彼の女の在學當時は、文學や、殊に哲學の本などは非常に熱心に愛讀して居つたやうである。成績なども決して惡い方ではなく、勿論危險な行動をとつた事などはなかつた。好んで哲

學書を愛讀して深刻なる人生問題に觸れて、絶えず頭を惱まして居つただけ、それだけ意識力に富んで居る故、先々の事は百も承知して居つたに違ひなく、決して狂奔的、盲目的に戀愛に惑溺したのではない事は明らかである。

詩や小說に現はれたる男女の戀愛は、優美、神聖、純潔なるものであつて、社會に現在する戀愛をば美化し、詩化し、理想化したもので、決して戀愛のありのまゝなる姿を現はしたものではない。靑年男女間の戀愛は何等か其處に醜惡なる結果を貽[2]さずして了るものは殆んどないので吾々は屢々戀愛の醜惡なる姿を見せつけられて居るのである。

要するに戀愛は靑年男女の脈管を滾々として流るゝ情熱の血が、最も危險なる形式の下に流露し來つたものであるから、修學期の男女には尤も怖るべきものゝ一つとして、敎育家は出來得るだけ、注意を與へたいと思ふのである。

（「新婦人」十二月號）明治四十四年十二月

我が先輩の意志ある所を聞け

本校では毎年十二月十七日を卜して豐明寮の開寮記念式を致します。之は同時に豐明圖書館、豐明敎育館の記念を意味するのでありますが、本年は例年よりも少し廣い意味の記念式として啻に豐明寮の一團ばかりでなく、本校の全學生並びに母校の娘でもある所の櫻楓會の團體に對してこの日を記念して一言希望を述べたいと思ひます。

然るにこの會に最も關係深く且女子敎育に多大の力を盡さるゝ森村翁がこの日頃御不快の爲に御出席願ふ事が出來ないのは誠に遺憾に思ふ所であります。併し熱心なる翁は病中わざわざ筆を執つて諸子の爲に種々なる注意を記して送られましたので、私は今その手紙を代讀する前に今一つ、森村翁並びに翁と等しくこの女子高等敎育の爲に、この學校と殆ど一心同體となつてお盡し下さる諸先輩を代表して其の意志を述べ、その希望とせられる所を諸子に告げることが適當であらうと考へました。

熱心なる森村翁が病氣の爲に今日出席せられないと云ふ事は卽ち、斯く敎育の爲に多大なる後援をして下さる諸先輩も、肉體を持つ人間である上は、具さに其の意志を語るべき時が、永久にあるものでないと云ふことを意味して居るのであると思はねばなりません。不吉と云へば誠に不吉なやうでありますが、それは皮相の觀で、眞に先輩の意志をして永久不滅たらしむるには、後繼者がよくその生命を相繼ぐ事にあるのであります。

人が若し其の臨終に迫り、最早自ら立つことが出來ないと悟つた時には其の意志を我が子に、或は自分の關係して居る團體に傳へんことを切に希望するものであります。私は先輩諸氏の意中を察して、諸子にその後繼を託するのであります。

私は嘗て、この記念すべき豊明館、豊明寮が建設された當時、これを生み出したる精神並びに其の精神の種子になつた豊明會の確信、理想を其の時の學生等に話した事がありますが、今日は再び其の時の決心を披瀝しようと思ふのであります。即ちこの豊明教育館を建設するに當りまして、私共は彼の教育家の鼻祖ペスタロッヂ先生の人格及び其の人格から發生した校風を此處に植ゑつけようと致したのであります。其のペスタロッヂ先生の言は今日私が先輩諸氏の意中を察して諸子に希望する所を云ひ表す爲に借用するに適當なる言葉であらうと思ひます。

ペスタロッヂ先生は、生涯非常なる努力奮鬪を續けられて、其の晩年に至つて漸く内は整ひ、外は同情者に充ちたが、其の時再び、師の業は敗れた。それは弟子達が相一致することが出來なかつたからであります。師の左右の腕となつて働いたニーデレルとシユツミットの兩弟子は、師の業が未だ困難なる時には献身相一致して師を助けたけれども其の業の少しく擧がると同時に、この兩人の間に面白からぬ感情が蟠つて遂に先生の高德も破壞さるゝに至つたのであります。先生は早くもこの禍根を見出して、その一月元旦に棺桶を其の前に置いて弟子達に向つて忠告的演説を試みられた。これは實に先生の最後の言葉と云つてもよい。即ち——

『舊年は去り新年は來れり。今余は諸子の間に立てり。諸子は余を以て喜びに充てりと思ふならんも、余は胸中一の喜びなく、只余の終りは近づけりと考へらるゝ事頻りなるのみ。今や余が頭上には天よりの聲響く。「神の僕は其の職務の報告書を出せ」と。余は完全なる報告書を奉るを得べきか否か。又余は神に對し人に對し自分に對し忠實なりしか否か、余は幸福なりや。余の幸福なりと云ふ聲は蜜峰の翅の如く響く。余は今死なねばならず、然れども余は其の幸福を受くるに價せず。故に余は幸福ならず、過ぎ去れる年々は幸福なりしも、もはや歩まんとする途上の氷は解けたり。余の天職は早くも失敗に歸せり。互の關係を結べる最も強しと考へたる結合力は最も弱かりき。余が救はれんと思ひしことは全く滅亡に歸し、平和ならんと思ひしは僞りにして、慈愛は實に冷酷なりき。

余は誠にあはれなる、謙遜なる、不德なる、價値なき、無智無能なるものなりき。然し自らの力足らぬにも拘らず、仕事に

邁進せり。世の人は狂氣と嘲りしも、大神の御手我と共にあり。而して余の事業は榮え、余の事業を愛する友人を得たり。然し余は爲したる事を知らず、余の爲に何が必要なりしかをも知らず。然れども余の事業は無物なり、榮ゆるを得たるは恰も天が渾沌の中より天地を創造したるが如し。これ余の仕事にあらずして神の仕事なり。願はくば神の働きによりて吾々の新たなる結合を計り給へ。その結合は惡魔の使の如くならず、天使と天使との一致の如きを望む。余、往年虛弱の身體を以て馬の危難より逃がれしを人々は不思議に思ひしならん。その不思議にもまして不思議に余の事業の保護されんことを望む。

余は間もなく死するも、今日のこの言は、永く諸子の胸中に生命あらしめよ。友人諸君、余の生涯に於て失敗せる仕事は、諸君によりて遂げられんことを望む。諸君は前途の障碍物を除き、余の失敗に顧みて其の轍をふむこと勿れ。諸子よ外面的成功によりて欺く勿れ。諸子は實に重大なる犧牲を要求されつゝあり。何事も犧牲を俟つて始めて完全に發達するものなり。現在の喜悅名譽は野にある草の如く凋み、春咲く花の如く散り失するものなるを忘るべからず。』

恰も正月の朝かゝる悲慘極まる演說を試みられたが禍は漸く其の根を擴め校運は次第に衰微して來た。先生は實に失敗に失敗を重ねて遂に此の世を去られたのであります。併し先生は教育の眞の意味に於ての大成功者でありました。この演說を見るとペスタロッヂ先生は『互にどうか一致共同してくれ、どうかこの事業の失敗の轍によらずして諸子によつて成就してもらひたい、諸子は互に過ちを許して目的の爲に盡してもらひたい』と云はれて居る。其の目的と云ふは何でありませうか、私は思ふ。只一致共同ではない只事業の成功ではない。先生の眼中には事業の失敗はない。只飽く迄も其の主張を貫いて行かれた所に幸福があり愉快があるのであります。ペスタロッヂ先生のこの意志は今玆に我が代表して云はんとする先輩諸氏の意中と相等しいのではあるまいか、暫く諸子と共に考へたいと思ふ。

この學校の評議員諸君が、この事業を永久に自治たらしめん爲に基金募集を發起せられるのも單に基金募集が最後の目的ではない。單に學校の隆盛を見て我々は安心することは出來ぬ。然らば又本校の學生が檢定試驗に通過したからとて、女子の高等教育が隆盛になつたとは見られない。その資格者を得る事によつて我々の目的は達せられたのではありません。之等は目的を達せんが爲に必要なる一種の手段ではあるが、我々が生命を捨てゝ追求する處のもの、又先輩諸氏が熱心に盡される所のものゝ目的は斯くの如きを云ふのではない。

省みるに我が校が過去十年に於て出した卒業生は千數百に上つた。この團體の櫻楓會は十年一日の如く努力奮闘して其の目的を達せんとして居るが、その道は頗る嶮岨で容易に達し得られない。其の原因は自己の力の不足もありませう、社會の空氣が冷たいといふ事もありませう。併しながら茲に一つの意志を貫徹するあつて、來り見よ、茲に婦人のレベルは擧れり、と云ひ得るや否や考へたい。凡ての根本の目的は卽ち此所に在るので、學生の多數は誇るに足りない。評判の如何は省みるべき價値はない。

ペスタロッヂ先生が世間から攻撃せられ非難せられたのも只其の目的を達せんが爲でありました。先生は目的の爲に遂に斃れられました。併し先生の高い人格、先生の尊い生命は其所にありました。

我々も亦常にこの目的を追求する所に安心立命を得るのであります。けれども人生は律(リズム)であります。大平和を求むれば必ず其の前に大いに戰はなければなりません。苦しみを恐れ失敗を恐れる人に到底大安心は出來ないのであります。我々は外部の成功不成功を省みるの暇がない。只目的の爲に忠でありたい。其所に私共の意志があり、其所に私共の結合力をもつて進みたい。この態度を以て教育の爲に、第二國民の爲に社會の爲に盡したならば、これ程偉いなる力はありません。金も貧乏も世間の反對も憂ふるに足らぬ事であります。先輩諸氏が諸子に託する所の事も卽ち之であります。

飜つて私共は、わが先輩諸氏がペスタロッヂ先生が棺桶に入る迄も努力せられたやうに、斯くあらんことを冀ふのであります。斯くて私共がわが先輩の眞意を相繼ぐことは、形に表るゝ記念式を盛大にすることよりも、より滿足せられ、より親切なる事であらうと思ふのであります。茲に森村翁並びに我が校の評議員先輩諸氏の意を代表して諸子に其の眞意を告げた次第であります。

（「櫻楓會通信」第四十一號・豊明寮記念式演說）

明治四十四年十二月

新年を迎ふるの辭

今年は我が　今上天皇陛下の御還曆に當らせらるゝ齡に滿ちまして、我が國民は殊に深い意味と喜びを以て新年を迎ふることであらうと思ひます。實に我が　天皇陛下には、今より六十年前卽ち今年と同じ壬子の年（嘉永五年舊九月二十二日）に御誕生遊ばされたのであります。この年は諸所に洪水があり、又

佛蘭西の使節は米國の事情などを齎し來つて　先帝に上奏し奉つた、と云ふ極めて出來事の多い時であつたのでございます。今上陛下には實に斯くの如き國家多事の場合に御誕生遊ばされたのでありまして、其の時　先帝より其の皇子に御命名遊ばされた　陛下の御幼名は「祐宮」と申し奉つたのであります。この「祐」と云ふ字は漢音で云へば「祐ゥ」といふ文字であります。この「祐」といふ御名前が今日から察し奉れば誠に意味愼重な御名であるやうに察し奉られます。彼の日露戰爭の時、我が軍の連戰連勝を報ずる時に東鄕大將はこれを「天祐」と云はれた事を諸子も今尙記憶せらるゝ事であらうと思ひますが、この「天祐」といふ意味は卽ち　陛下の稜威と歷代の神の加護に依るといふ意味をもつた言葉であります。この「天祐」といふ言葉はあの時東鄕大將が初めて云ひ出された言葉であつたかと思ひますが、その後屢々用ひられる「天祐」といふ文字も皆この意味をなして居ると考へられます。卽ち我が　陛下の御幼名と同じ意味のものであります。天がこの民に、斯くの如き文武兩道を兼ね備へ給へる　陛下をこの國土のこの民に降臨あらせられるたるは、卽ち其の事よりして「天祐」を意味して居ると考へられるのであります。丁度この年嘉永五年壬子の年は、西曆の千八百五十年か或は五十一年に當るかと思ひますが、その頃恰も西洋に於ては近世諸般の活動を支配して居る所の「進化(Evolution)の假說」が生れた時でありました。卽ちダーウインが一生の研究を積んで、丁度　陛下が御生れ遊ばされた殆どその頃に、進化論から論じました動物に關する大著述二卷を發表したのであります。やがて　陛下が御八歲にならせらるゝ頃には我が國に於ては彼の尊王攘夷論、大義名分說が盛んに稱へられて、帝室に政權を再び御恢復になるといふ時機でありました。卽ちこの年　陛下には大觀兵式を行はせられ、當日雷鳴風雨の中に御野立あらせられて、その儀式を行はせられました。其の年西洋に於てはダーウインの「種の起源」が出版されました。この書は殆ど世界各國の言葉に飜譯されまして、近代文明の福音とも云はれたものであります。この書の根本となつて居る進化論はスペンサーの新說のやうになつて居るが、古くは希臘から其の考は發して居り、又ダーウインの以前にもこの進化論を稱へた學者もあつたのであります。これ等の思想は實に其の當時の時代の精神を代表したもので、それから六十年來啻に學術界のみならず、政治上にも宗教上にも、教育上にも、社會學上にも、凡ての人間の假說となつて、世界總ての殆ど學者總掛りでこの說の證明を續けて來たと云つてもよい。否學說其のものばかりではない。其の後半期はその信仰の應用時代とも云

ふべき非常なる人類の進歩發達の土臺となつたというても過言ではあるまいと思ふ。そこで其の話はダーウインに始まらず最早英國の十四世紀頃に崩して居つて、その十六世紀に於ては英國の政治上の改革を見るに至つたと云ふ事が出來るのであります。この近世文明の思想界に於てはこの進化論が政治上の革命、革新、進歩の土臺となつて居るのであります。即ち進化論を土臺とした實行は、其の人類の新しき經驗發達進歩の歴史と云つても差支へないのであります。斯樣に、我が　陛下の御誕生遊ばされた時代は、世界各國に於て舊文明は衰へ、新文明は駸々乎として進むといふ時代、即ち「進歩」といふ事が當時の社會精神であつたのであります。幸に當時わが國が、其の精神に同化し、反映する崩しがあつたといふ事は我が國民が殊に喜ばなければならぬ事であります。

我が國の明治の革新を考へて見ますると、その當時の人々が如何に先見の明を以て、その時代の精神に觸れて行つたかを思はしめらるゝものがあります。

私は先日、前神奈川縣知事周布男爵に招かれて一日その客となりました。周布男爵の父君は周布政之助と申されて、明治維新の際我が國の先輩は何れも尊王愛國の精神堅く、或は保守主義を或は進歩主義を固守して動かなかつた事は何人も知る所であるが、此の政之助氏は當時の志士として自盡、以て國論を喚起せる人でありますが、其の先輩村田靜風氏が、周布氏に宛てゝ其の年（今より凡そ八十年前）の元旦に書かれた手紙が殘つて居ります。それを私は見せてもらつて再び今朝之を諸子に話したいと思ひまして周布男爵からわざ〳〵その手紙を寫して送つてもらひましたから一讀いたしませう。

靜風翁の手紙

一、寫

新禧奉壽候舊冬被下候尊書へ加批點候而奉復候心事萬縷拜面ならでは不被申盡候

貴兄御覽被成度書左の通

一、海外新話　可被成御讀存候前車のくつがへる後車のいましめなるべし

一、海國兵談　同上、海寇防禦の先見可驚可畏

一、懲處錄　同上、ヤマイヌ城市を走り候事可被成御存候此等の事城中にも近事有之哉に感候

一、螢蠅抄　同上、是は和學家は存知の書なり、古代より日本を冒候事集候塙著述にも御座候

一、北搓事略

一、二波談奇
一、環海彙聞
一、日本遭厄紀行
一、見達話
一、文化年レサノツト日本使節紀行

右の外多々有之候いい田猪之助なる者へ可被成御話候當今の海外學文立の人に御座候道家新藏も藏書多く有之候唯々目前の小事を日々御拮据被成候而千歳の大事を御忘れ被成まじく候いづれ深夜に御讀書可被成候當今我朝の深憂は海寇の事と存じ候肉食の者は賤しと明末の賊申せし事宋末の僞君子の誹り時々刻々御案被成候穴賢

靜翁

國相府樞察吏

畢竟この時代から既に世界の大勢に眼をつけて、國を憂ひ、君に事ふる熱誠は實にこの手紙の上に溢れて居るやうに思はれるのであります。卽ち其の時代の空氣は何であつたかと云ふと、世界の大勢に後れぬやうにしなければならぬ、我が日本も此處に覺醒してその進歩發達に則らなければならぬと云ふのであつて、この人々は卽ち之を覺つた先覺者であるといふ事が出來る。私共が子供の時にもさう云ふ刺戟を受けたと云ふ事を微かに覺えてゐる。

國も人も希ふ所は大義名分を重んじて、各々其の信ずる所を行うたのであるから、何れも血を以て爭うた。進歩主義を取つた人も矢張り多くの迫害をうけたが、結局それは時代の潮流であつて、遂にその主義が成功して居る。卽ち我が國が進歩主義をとつて世界の潮流に則つたのであります。此の時は、常に私が申すやうに實に我が國の危機で、彼の朝鮮、印度のやうな運命に傾くか、或は世界一等國の列に入るか、この興廢の別れ目であつた。此の時に當つて我が　陛下祐宮の御降誕があつて、御幼少の御時から益々其の當時必要なる御教育を御受けになり、そして御年御丁年に達せらるゝ頃には既に維新の大業を御成就遊ばさるゝといふ、實に非常なる御偉勳を御遺しになるといふ御運命にあらせられたのである。かくて維新後再度の危機に於ても常に適當の御處置を遊ばされ、又我が國民が斯くの如き稜威に浴し得ることが出來たのは實に東郷大將の云はれた「天祐」の外ないのであります。

新しき德

皇室に於かせらるゝこの御稜威は申す迄もなく、皇祖皇宗の御懿德であつて、彼の三種の神器によつて顯はされ我が國民性となつて居る所の勇、仁、明の德に依つて實に今日の　陛下の

稜威の大成をしたものであります。併し　陛下が維新の大業を御成就遊ばさるゝには特に又一つの新しき御德を加へさせられたのであります。これは明治の御代に缺くべからざる所の御德であつて卽ち「進歩の德」Progressive hirtue であります。之は實に近世文明の各國に最も必要なる德であります。この德は何れの國にも亦、古くからもあつた德であるが、これが高潮に達したのは極く近世の事であります。西洋諸國に於ても彼のエピキユラスの快樂說、ストイツクの克己說（これは日本に於て武士道となつて現れたもの）、プラトンの稱へた德（智、勇、節制、正義など主なるもの）が漸次完全に發達して、其れが後に宗教に於ては基督教の德「愛」とか又は東洋に於ては仁、慈悲といふやうに現れて來ました。以上云つた德、之が卽ち人間の價値である原動力であると稱へられ行はれて來たのであります。然るに近世に及んで、動々もすれば靜的に流れやうとする之等の德が動的になつて來た。卽ち活を入れた德卽ち進歩向上の德が加はつたのであります。之が卽ち革命となり改革となつたのであります。我が　陛下が歷代の御懿德に加へさせられた御盛德は卽ちこれで、御治政の始めに當つて先づ國民をして自治體を御裁可あらせられたのであります。これが卽ち東洋の先覺者たり、日淸日露の戰に勝ちを得、朝鮮をわが有に歸した原動力であります。此の德が西洋を今日の文明に來らした原動力であり、之が支那や露國に入りて今日の革命となり、國會要求を叫ばしむるに至らしめたのであります。私共は今年　陛下の御還曆を衷心御祝ひ申し上ぐると共に實にその御明德を感じ奉らざるを得ないのであります。と同時に明治の御代となつて益々その德に滿ち渡らせらるゝ御事を思ひ奉るのであります。

聖上には御誓文の如く、御勅語の如く、凡てを改善し、根本の事も民衆と共に議せられ、我が國政を進めて立憲政體とし、我が國民を自治の民たらしむる爲に日夜御軫念あらせられた御事蹟は玆に一々擧ぐる遑もない程に多いのでありますが、今書物に載つて居ります御逸事の一を索いて申しますならば

『憲法は國家に取りて上も無き尊き法典なるはいふべくもあらず。されば其の草案の樞密院會議に附せられし時は議官何れも肺肝を碎き心血を注ぎて熱誠事に從ひしかば、院の討議はなかなかに盛んにして凡そ四個月の問議官悉く院につどはぬ日とてはなく、かつ日々五時間に涉りて其の研究を重ねたり。

此の折かとよ

陛下は院議を聞召さんとて日々午前十時より院に臨御ありて、定めの座につかせたまひ、討議に御耳を傾けさせたまひ

しは申すまでもなく、只僅に戸山學校へ行幸あらせられし一日のみ會議への臨御を止めさせたまひけるとぞ。

かくて其の會議のいまだ終らぬうちに早くも夏季とはなりぬ。年々の定例なれば、暑中賜暇恵みに浴せる有司どもはおのがむき〳〵避暑旅行を企つるものも多かりしが、陛下には燬かんばかりの炎暑をも厭はせられず、例のごとく院に出御ましまして午前十時頃より午後三時までも倦ませたまへる御氣色だになく一々討議を聞召したまひぬ。議院法の議事を聞召したまひける折の事とかや。

照宮殿下御薨去あらせられ、侍從より其の事奏上し奉りしかば、議長は驚きながらも畏みて「議事をば直ちに中止つかまつるべきか」と伺ひたてまつりしに　陛下には「それには及ばず議事をつゞけよ」と仰せ出されしかば、議長は大御心のありがたきに感泣し議事の一段了りし後始めて散會を宣告したりきとなむ。』「聖德餘聞拔萃」

私共は斯くの如き　陛下の御進歩の御德を感ずると同時に又我が　皇后陛下が我が國民の母たる女子を進め高めん爲に、御自らお示しになる生きたる手本並びに御奬勵遊ばさるゝ有難き御言葉を忘るゝ事が出來ません。皇后陛下が我が國の娘にお示しになつた生きた模範並びに深い刺戟をお與へになつたものも亦茲に一々擧げる事は出來ませんが、只一例を擧げて見ると、我が國では彼の御勅語並びに、陛下の御歌は西洋の人々が經典を信重すると同樣に感じて居るのでありますが、舊時代の迷信の例に倣うて、唯之を有難がり、例へば舊時代の天主教徒が、其の經典を信じ、敬虔し、之を神の默示として何の批評の餘地もなく、之を信じ盲進したそれの如く、この弊に陷つた時代がないでもないが、皇后陛下には陛下の御德が斯くの如きものではない事を御實行にお示しになつてゐらせられるのであります。其の例は嘗て十年前に　皇后陛下が十二德と云ふことを御題にして御歌をお詠みになつた事がありますが、昨年小松原文部大臣が其の御歌を國語讀本中に入れ奉る爲に、御下賜を願つた處、陛下には恐れ多くも其の當時から最早や十年後の今日の御進み遊ばされた御考を以て、御手づから御氣に適はぬ處を更に御訂正遊ばされてお下し賜はつたといふ事であります。之卽ち進歩の御德を備へさせらるゝ　陛下の御實行と見奉るのであります。私共はその御歌の深い意志と、其の御實行とを考へて陛下の御進歩の御德を思ひ且學ばなければならぬと考へますから、今朝の御祝詞に、尙この御歌をも再錄し奉つて、私共の今年の修養の指針として此等の德を養ひたいと思ふのであります。

十二德の御歌

節　制

花の春紅葉の秋の杯もほど〳〵にこそくまゝほしけれ

清　潔

しろたへの衣の塵は拂へども憂きは心の曇りなりけり

勤　勞

磨かずば玉の光は出でざらん人の心もかくこそあるらし

沈　默

過ぎたるは及ばざりけり假初のことばもあだに散らさざらなん

確　志

人心かゝらましかば白玉の眞玉は火にも燒かれざりけり

誠　實

とり〳〵につくるかざしの花もあれどにほふ心のうるはしきかな

溫　和

みだるべきをりをばおきて花櫻まづ笑むほどを習ひてしがな

謙　遜

高山の影をうつして行く水の低きにつくを心ともがな

順　序

奥深き道も極めん物事の本末をだに違へざりせば

節　儉

くれ竹のほどよき節をたがへずば末葉の露も亂れざらまし

寧　靜

いかさまに身は碎くともむら肝の心はゆたにあるべかりけり

公　義

國民をすくはん道も近きよりおし及ぼさん遠きさかひに

我が國の第一維新は、陛下の御懿德と、進歩發展の御德によりて完成せられましたが、今や第二維新卽ち根本的內面的の維新に我々は猛進せなければならぬ時となりました。この第二維新に我が國民は最も力を盡さなければならぬと云ふことは疑ひもない、殊にこの維新の大責任は我が國婦人が最も自覺しなければならぬ曉となりました。この新機軸に入らんとする時に當つて東洋の大革命支那帝國の革命は創始された。我々は陛下の御懿德を翼賛し奉り、同時に世界の大勢に鑑み進歩改善の德を益々內より發揮せしめて、各自の責任を全う致したいと思ふのであります。

（「櫻楓會通信」第四十一號）明治四十五年一月

我國女子の將來

一

世界の進歩は駸々として一刻もやむ時がない、眞に日進月歩の有様である、斯の如き趨勢に參じて、凡ての智識を消化し凡ての事業を經營して、文明の美果を今日に收めた功は、殆んど男子の力であると言つても過言ではあるまいと思はれる。女子は表面上殆んど與つてゐない姿を呈して居る。殊に東洋に於ては之が爲めに男尊女卑の風習を馴致して現代に至るまで尚この傾向より脱する事が出來ぬ有様である、而も女子は斯の如き累代の偏頗なる習慣の下に生死して、格別何等の苦痛を感じなかった様に見えたけれども、然しながら時代の進運は教育の普及を來し、教育の普及は其結果として個人の覺醒を促す事急に、永く婦人をして從來の束縛の下に晏如たる事を許さないのである。女子自身が斯の如く感じて來るのみならず、社會夫れ自身が實に女子をして斯る境遇に立たしめなければやまぬのである。男子が社會の表面に立ちて自由なる活動を續けてゐるときに、愚鈍にして何等社會の進運に伴はざる女子の存在を許すといふ事は、明かに矛盾した事である。女子は固より男子と異つたる使命を有する、直ちに男子と全然同方面に活動し得るものとなすは、今遽かに斷言する事の出來ぬ問題であるけれども、然れども男子と共棲して一家經營の重責に任じ之を内にしては子女の養育と良人の内助と、之を外にしては社會の進運に伴う幾多の現象に對し、適當なる處理をなすべき使命を有して居る。此使命を完全に果す爲めには、實に總明なる智識と明確なる識見とを要する、若し夫れ女子が從來の跼蹐たる小天地に蟄居して、徒らに活社會から隔離して生存して居ては、如何して此等の職責を果す事を得やう。高等教育の不必要を唱へたり、或は臺所にのみ女子を押し籠めやうとするが如きは、是れ社會の進運を無視した暴論と云はざるを得ないのである。

二

而して又一方政治史的方面より觀察して來ると、尚ほ明かに這般の道理を看取する事が出來ると思ふ、卽ち古代に於ける國家は多くは君主專制の政治であつた、上に立つ人一人の意志の儘に、其國の政治をやつたのである。之れ古代に於ては実際の强者が、其部落なり又は團體を征服して、自ら君臨したのであるから、勢ひ君主獨裁といふ結果になるのは敢て怪しむに足ら

ないが、然し人智漸く開けて、人は各自獨立の思想と技能を以て社會に生存するやうになり、社會制度も整然として秩序正しくなると、專制政治は茲に其姿を没して、人民の意志をも容れる機関を有する政體が表はれて来る、今日に於ては立憲代議政體が最も完全なものとなり居るのも之が爲めである。現今列强の政治組織は種々あつて一樣な立憲代議政ではないけれども、其運用の實に於ては、民衆の意志を尊重して、之を容れるやうな組織になつて居る、兎に角之が最も進歩した政治組織の形式と云つてよいのである。

一家は猶ほ一國の如しで、斯くの如き國家の政治組織はやがて一家の政治組織でなければならぬ、一家の政治組織のみが、この歴史的大勢から獨立して存在する事は出來ないのである。然らば從來の固陋なる習慣に捕はれて、女子を臺所の一隅に蟄居せしめて、何等其權利を認めず、家長獨裁の政治を行ふ如きは、之れ實に古代朦昧の時代に於ける組織を、文明の今日に强ゐやうとするものであると云はねばならぬ、若し之が專制政治になれた昔の女子であつて、何等覺醒の刺戟に觸れなかつたものであるならば格別、現今の如き女子教育が盛大になつて、凡ての方面に於て女子の自覺を要求する事象に滿てる時に當つては、如何しても專制政治を打破して代議政治を施さねばならぬ時代である。故に一家の政治最進歩した形式のものでなければならぬ、若し果して然りとするならば、思子の相談相手たる女子が、眞によく社會の事情を理解し、良夫を助くる才能を有するものでなければ、決して良好なる代議者と云ふ事は出來ないのである、想ふに最も良き家庭は聰明にして健實なる妻を其相談相手として有する事であらうと思ふ。此處に至つては何人と雖も、女子の高等教育を不必要とし、或は厨房にのみ隱るゝ事に賛成する者は斷じてない筈である。

尙ほ斯の理を推し擴げて行くならば、女子が一國の政治組織にも當然關與し得る時代が來る事は明かである、現今歐米に行はるゝ女權獲得運動の如きは其手段方法に於ては尙ほ幾多の批難を免れない處があるにもせよ、女子が男子と相對して相當の權利を有し得る時代は早晩來るであらうと信ずる。

三

時代の進運は益々女子の教育を必要となす事は、以上の理由で明かであるが、猶ほ此處に忘るべからざるは、女子の精神的發達と共に身體の健全なる發達を計らねばならぬ理由の存する事である。此の問題に關しては敢てくど〳〵しく云ふ必要はないと思ふが、女子の健康問題は其精神的方面よりも却つて忘れ

られたる處のものである。羸弱なる女子が決して強健なる子女を擧げ得ない事も明かなる事実であるし、不健康なる女子の家庭を經營する場合、若しくは子女を教育する場合等に於ては、寧ろ慘憺なる悲劇が多く胚胎されるものである。近來歐米に於て人種改良論（ユーゼニックス）の漸く盛に唱導せらるゝのも、實に斯の問の弊害を矯めて、國家百年の基礎を固うせんとするに原因して居る。予は此の意味に於ても女子の教育は今後益に盛にし、精神の方面に於ても身體の方面に於ても共に健全眞實なる女子を作らねばならぬと思ふ者である。其方法論に至つては更に詳細なる議論を要する處であるが、要するに我國將來の女子は男子と相携へて其使命のある處に向つて奮進しなければならぬ運命を有して居るものである。更に聰明に更に健かにならなければ、到底時代の要求する處に應ずる事は出來ぬと思ふ。（文責記者）

（「新女界」第三巻第十一號）明治四十四年十一月

年頭所感

國と云はず人と云はず、必ずや遭遇すべき危期がある、危期とは進歩を目的とする事物の變化が或る一定の時期に達し動搖を來たさんとする時期を稱するのであつて、所謂轉化の時期である。然れば此轉化によく順應すれば發展して幸福を增進し、順應する能はざれば退歩して災禍を招き浮ぶ瀬がないやうになるのは國や人も同樣である、人の危期は所謂厄年で凡そ十年毎に到來し、國の危期は一世紀を劃して變化の跡を歷史上に見はして居るが、今は短縮されて十年毎に小世紀に此危期變化を迎へ送つて居る、之れを新興国の我日本に就て見れば一層著しき感がある。

畏れ多い事であるが　聖上の實齡に照らして、之れを稽ふれば、十歳の御時には米艦の來航に促されて國の上下を擧げて、長夜の夢を破られ、二十歳の御時には維新、三十歳の御時には西南の役、四十歳の御時には憲法發布、五十歳の御時には日清日露の役を經て、新日本の世界的地位確定し、六十歳の御時、卽ち昨今兩年にかけて、隣國の動亂發生す、之れ元より我國の出來事に非ざるも、老帝國の革命は惹きて東洋の維新とも云ふべき大波動を受くるの秋に遭遇したのである、之れを教育の方面に見れば、明治五年第一の教育勅語を始めとして十年を経て女子の尋常小學教育、次ぎの十年には高等小學と實業教育とが共に完成し、次ぎの十年卽ち二十年より三十年迄の間に於て、中等教育の萠芽、發生し、實業教育は普通教育の趣味を帶びて益々發達し、次ぎの十年間に於て、女子教育も高等女學校程度

に迄高まり、此間明かに一弛一張の危期動揺ありしを認め發達の徑路は劃然と一小世紀毎に階段を踏み來つて居るのである、而して最近に於ては、女子高等教育發達の曙光を認むるに至り、又も茲に予輩の所謂危期厄年を迎ふる事となつたのである。蠡つて、今日迄の女子教育を見るに、模倣時代又は他動的時代であつて、單に欧米諸國の形式を真似るか、四圍の刺撃に対し他動的に發達を遂げたに過ぎない、眞に女子自身が覺醒し、教育の必要を認めたと言へない、然れば其指導も亦專ら男子の力に依つたものであるが、兎も角も女子教育機關も一と通り備はり、今日では高等教育の萠芽も漸次發育を遂げつゝある狀態で、之れよりして自動時代、研究時代となり、卽ち眞の女子教育時代に入らんとするのである、然れど右に述べた如く、今日迄の女子教育と云へば、女子自身は云ふ迄もなく、教育家を始め、父兄も學者も及至政治家も、女子を研究し、又眞に國家社會を基礎として、割り出したる適確の教育方針と云ふものはなかつたので、守舊派と目ざされる一派の人々は、我國の古來の習俗を基礎とし、狹溢淺薄の賢母良妻主義を固執し、進歩派は欧米の事とし云へば直ちに移して其根底を問はぬ傾ありしため、其結果は所謂過渡期に於ける女子教育弊害を、云々せしむるに至つたのである、然るに、今や之等の時代は經過して根本より確乎たる主義、新なる精神を以て新時代に入らんとするのである、予輩は敢て一から十まで、欧米の謳歌者ではないが、彼の國の女子教育が、如何なる方針、如何なる根底によりて、改善されつゝあるかを、研究し我國の夫れと對比せば、實に其大差あるを歎ぜざるを得ない、一例を云へば、彼のスタンレーホールの青年期、教育問題、等の如き、凡て多數の米國婦人の觀察經驗材料として著述されたもので、既に此等の研究を教育に應用して、着々その効果を奏せんとして居る、近來は又人種改良學や遺伝と云ふ方面の研究を教育に應用し、社會學生物學の如き、女子も教育家も研究して教育の基礎を確定し、之れを教育の実際に應用すると云ふ有様である、又宗教と教育と云ふ方面から觀察して見ても、元來教育は精神的でなくてはならぬ、信念と確信とを與へなくてはならぬ、彼の危險思想の如きも確かに頭の空虛を意味するものであるが、我國在來の宗教の如き學術と矛盾し青年の信念を滿足せしむる事は出來ぬ、然らば耶蘇教は如何と云ふに、外國に於ても學問の進歩に伴ひて段々變遷して來て居ると云ふ有様であるから、人格も養成し、生命の淵源を開拓し得るには、ドウしても哲學と科學との土臺の上に立ちたる宗教でなくてはならぬ、之等の點を綜合して、第一に、切實に感ずるのは、女子の高等教育の必要と云ふこと

であつて、殊に時勢の進歩は女子が自動的根本的の教育を受けねばならぬと云ふ域に達した事である、然れば、人種改良學社會學と云ふ方面や、四圍の事狀、各國との平和からも日本婦人を研究し、之れを基礎として、女子教育の根本を定め、而して新時代の女子教育に入らねばならぬと考へる、元より裁縫料理と云ふやうな、實地に必要なものゝ習得も等閑に附する譯には行かぬ、然しながら、之等の仕事も頭を拵へて掛れば、其進歩が著しきのみならず、時勢の變遷に伴ふ衣食住の改善といふやうな事も出來得るのである、如此云へば現代の女子教育を誹謗し、徒らに危期呼はりするやうであるが、新時代新教育の期に入るべき今日、變化動揺の一階段を經ねばならぬ事は明らかで、新年を迎ふると共に時代の歸向するところを察して方針を誤らぬやう務めねばならぬと切に感ずるのである。

（「淑女かゝみ」第二號）明治四十五年一月